生協ひろしま 産地交流会

寒暖差がおいしさを生む

安芸高田市吉田町では、15戸の農家が加入する「於手保（おてぼ）農場夢21」が、約20ヘクタールの田んぼで米づくりをしています。同町多治比地区は、昼夜の寒暖差が大きく、稲作に適した土地。水分と栄養分をしっかり保持する粘土質の土壌、台風が来ても風が当たりにくい地形、そして清らかな水など、米づくりに必要な条件に恵まれています。

農薬と化学肥料を半分以下

大きなこだわりは、特別栽培です。特別栽培とは、農林水産省のガイドラインに基づき、化学合成農薬（使用回数）と化学肥料（窒素成分量）の使用を、その米が生産された地域の慣行レベルに比べて5割以下に抑えて栽培すること。

「農薬の使用回数や量が少ない分、稲を病気から守るには生産者の手腕が問われます」と、農家を支援するJA全農ひろしまの太田哲也さん。特に水管理には細心の注意が必要だそうです。於手保農場夢21代表理事の西川美富さんは「除草剤を使うのは、田植え時の1回だけ。効果を最大限発揮させるために田植え後の1週間は、土が水面から出ないように、水が田んぼからあふれ出ないようにと、毎日3～4回は田んぼの状態を確認しています」と話します。

※「安心！広島ブランド」…農薬と化学肥料を慣行使用の5割以下に抑えて栽培した県内の農産物を広島県が認証している制度

肥えた土で米づくり

昔から「米づくりは土作り」といわれるほど、土は重要な要素です。於手保農場夢21では牛糞とわらを混ぜ合わせた堆肥を投入することで、上質な土作りを実現。西川さんは「化学肥料を抑えているせいか、土そのものが持つ力も上がっている」と感じているそうです。しかし、肥沃（ひよく）な田んぼになればなるほど、稲の成長に必要な光や水、栄養などを横取りする雑草が生えます。除草剤の使用は限られるため、年に3回以上は草刈りを実施。特に暑い夏の草刈りは困難を極めます。

農作業は常に自然が相手です。昨年は7～8月にかけて晴天が少なく気温も上がらず、米づくりの現場では例年になく厳しい状況が続きました。「特別栽培米は手間と時間がかかりますが、それだけおいしさには自信があります」と西川さん。

私たちもおすすめします

子どもたちからも「おいしい！」と人気！

朝食はパン派からごはん派になりました

産地交流ができるお米は最高です

於手保米作りの交流会に参加されている井上さん一家

手間ひまかけた安全・安心のお米をお届けします

【企業プロフィール】
農事組合法人 於手保農場夢21
平成14年11月、「農地、地域、住民を守る」を合言葉に設立。「生協米あきろまん（広島産）」の産地でもある。

代表理事
西川 美富さん（右）

JA全農ひろしま
農家が安心して農業を営めるように、さまざまな営農指導を行っている。

JA全農ひろしま
太田 哲也さん

生産者さんと組合員さんの

顔が見える産地交流会

生協ひろしまと於手保農場夢21は、19年前から産地交流会を行っています。田植えにはじまり、生き物調査や草刈り、稲刈り、収穫祭など年に5回。米づくりの現場を肌で感じることによって、安心・安全な生協米のよさを再確認できます。

水をはった田んぼに入り、昔ながらの手植えに挑戦

ゲンゴロウ、ヤゴ、トノサマガエルなどを発見！

田んぼや水路にすんでいる生き物を調べます。専門家からは「毎年、生き物の数が増えている」との声をいただきました

稲刈りを通じて、実りの秋を実感

収穫したお米や地元野菜をみんなで調理。秋の味覚を楽しみます